
転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した俺はE.Sの世界で折原臨也になった！

【著者名】

NZマーク

N6851W

【作者名】 餓鬼

【あらすじ】

ある日死んだ俺は神に転生させられました。E.Sの世界に居た。

もし、誤字などがありましたら指摘してください。

転生だとー（前書き）

この小説は作者の思ひつこで書いたものなので悪しかりや。

転生だと！

皆さんはあるだろうか？
死んで目が覚めたら阿部さん似の人があの前に居る恐怖を

「俺、ホモじゃないから許して」

俺は土下座をしたぜ、それもジャンプして。

「いや、俺、ホモじゃないから」

なんだと！ こんな

ホモじゃないと！？

「わいわいか」

「讀唇術」と

「ナニヤー」

二物がつ、イアメハボイスド蘭づゞ、ハセダニ。ハセダニ。

「一歩はつ、なんですか？」

「すまない、俺の名は河部だ

「俺は創造神だ」

中二病乙

「俺は、お前の命を無くしてしまった」

スルーだと……命を無くした、俺つてこいつに殺されたの？

「そこで、お前に新たな人生を生きてもう」

「ありきたりな設定だな」と

「お前には、HISの世界で折原臨也になつてもひつ」

「おこ、なぜソード『トーナリーラー』のキャラが圧すべく

「俺が好きな小説のキャラだから？」

コイツの頭は大丈夫か？

「そうと決まつたら、さつそく転生だ」

いきなりすぎないか?

「行きたくなければ、や・ら・な・い・か？」

「是非、行かせてもらいます」

「イイツ、本物の阿部さんだろ！ 絶対！」

「なら、こいつてこい」

あれ、足元が無くなつたような……つて、無くなつてゐるし…

「次、会つたらこひすうううううううううううううう！」

そして、俺はHSの世界に転生してしまつた。本当に折原臨也の姿で、それ以前に小学生まで戻つたが、なんで俺がこんなことをでも、俺つて臨也のキャラつて好きなんだよな。

キャラ設定

名前：折原 いさや

旧名：東條 ひでき
秀樹

見た目：『デュラララ！』の臨也そつくりに転生したため性格までもが臨也そつくりになってしまった残念な元高校生。

人間関係：織斑姉弟と篠ノ之姉妹とは幼なじみ、一夏と簫とは同じ年、千冬は静雄的な立ち位置に着いたって、ちーちゃんって呼ぶのが面白かったからｗｗｗｗ、束とはとても仲がいい似た者同士だから？

年齢：永遠の18歳（15歳）

今の所ヒロインは千冬さん、束さん、楯無さんの三人ですかね。主人公は転生してもしなくても鈍感です。こんな感じですがEISの設定は専用機が出てきてから書こうか書かないか迷っていますが、名前だけ発表します『デュラハン』です。この名前は神が付けたことになります。設定もチートです。

ヒロインの追加をします、ギロさんの案で山田先生を追加します。

計画がおつ！

転生してから10年がたつた。今は立派な高校受験の日、俺はいつものように椅子に座つてパソコンを弄つていたら携帯に着信がきた。

「どうしたんだい、一夏くん」

この喋り方は面白いな。

『イザヤ、すまないけど道を教えてくれないか？』

『氣づいたかい、皆俺の事を臨也ではなくイザヤと呼ぶんだ、何でだろうね？』

『次、見た扉を開けるといいよ』

『ありがとな』

思つたけど、一夏くんは人を疑うことじよつね。

『おつと、チャットを止めてしまつた』

『甘楽、みなさん知っていますか？』

『ウサギ、なになに？』

『鬼、詰まらんかつたら、叩くぞ』

『甘楽、いやん、鬼さん怖い』

『ウサギ、怖いよ』

『鬼、早くしろ（怒）』

『甘楽、実は、男がエスに乗れるつていう都市伝説』

『鬼、よし、しばきに行くか』

『鬼さんが退室されました』

『秘密モード』

『ウサギ、いつくんのこと？』

『甘楽、教えません』

『ウサギ、毎日が楽しくなりそうだねイザくん』

『甘楽、やつぱり、日常より非日常の方が快感だね』

『ウサギ、M発言かな？』

甘楽さんが退室されました

ウサギ『落ちちゃつた、なら私も』

ウサギさんが退屈されました

「うーだな

俺はイザヤに言われた通りに扉を開けるとそこにはEVAが置いてあつた。

「何でここにISがあるんだ

卷之五

「俺は興味本位で ISISに触れると ISISが光りだした

何たよこれ

「何をしてるんですか」

後ろから女人たちが入ってきた。

「ISOが起動している」

今、何て言いましたか？

卷之三

男が口を起重させるなんて」
イザヤああああああああ、お前、嘘言つたな！

新学期の準備（前書き）

チャットルームでの話し方を変えます。

甘楽は《》

鬼『』

ウサギ「」

で行かせてもらいます。

新学期の準備

「おや、もう『コース』やつてるじゃないか」
その『コース』は一夏くんがISに乗ることができる『コース』だつた。

「俺はこれから『ゼブ』って原作に介入しようつかな」
『私に用かい』

突然目の前に阿部さんの幽霊が目の前に現れた。
「やあ、どうしたんだい？」

『反応が鈍いな』

何を言つてるんだろうな。

「用が無いのなら、お引き取り願おうかな」

『君に『コレ』を渡しに来たんだよ』

渡されたのは小さなナイフだった。

「これはISの待機状態かい？」

『驚かないのかい？』

転生したのだから『コレ』には予想はつくだらう。

「只の勘だよ」

『なら、これは渡して置くよ。ついでにIS学園に編入届け出して
おいたから』

『あなたはいつも勝手ですね

でも、これで原作介入がしやすくなつたな。

『それでは私はこれで失礼します、アニメが見たいので』
頭の中は子供なんだね。

『それじゃ、俺は原作を楽しむよ』

阿部さんは闇の中に消えていった。

『いよいよだね』

俺は部屋の窓から外の景色を見ながら叫んだ。

『楽しみだなあ。楽しみだなあ。楽しみだなあ。この街は俺でも知

らない事がまだまだ溢れ、生まれ、消えていく。これだから人間が集まる街は離れられない！ 人、ラブ！ 僕は人間が好きだ！ 愛してる！だからこそ、人間の方も俺を愛するべきだよねえ」

このセリフは一度でも良いから言つてみたかったんだよねえ。

チャットルーム（深夜）

苦労人さんが入室されました

「こんばんわー」

《こんばんわ》

『ばんわー』

「やあー」

《苦労人さん、今日の昼間はどういうに行かれていたんですか？》

「高校受験に行ってました」

『「落ちたらいいのに」』

「酷くないですか！」

《皆さん、酷いですよ。一応、応援しましょつよ》

「甘樂さんも苛めるんですか！」

《『『面白いから（ですよ）』』》

「ここには、俺の敵しかいないのか」

「今更だねえー」

《そこは、隠しておかないとけませんよ》

「あんたちは、悪魔かあ！ それよりこれから、あまり来れないと思います」

《彼女が出来たんですか？》

『早く吐け！』

「違いますよ、高校からタウン ージぐりーの厚さの資料を渡されたんで読まないといけないんで」

《それで、思い出しました。今日なんと男のエス操縦者が現れたそ

うですよ』

苦労人さんが退出されました

『拗ねて帰ったな』

「暇だあ」

『なら、私たちも落ちましょうか』

甘楽さんが退出されました

鬼さんが退出されました

ウサギさんが退出されました

入学？

いやあ、Jの日が来るとは思わなかつたよ。門の前で待機しておけと言われ待つていたら、迎えに来た教師がちーちゃんだよね。

「久しぶりだね、ちーちゃん」

臨也の顔では滅多に見ることが無いスマイルであこわつをしてみました。

「ニーナー やー りーでは、織斑先生だ！ それに、制服はどうした！」

俺の格好はいつもワード付の黒いコートを着ているよ。
「いやーあれね、来るときにステーキのたれがこぼれてね」

「まあ、今日は許そり」

ちーちゃんの顔は少し赤くなつていて、熱でもあるのか？

「それよりさあ、早く教室に行かなくていいのかい？ 結構時間立つてゐけど」

「むひ、もうだな行くぞ」

なんか機嫌悪くなつたけど何でだ？

「楽しみだな」

「何がだ？」

「だつてさ、ちーちゃんや一夏くんがいるから楽ししくなこし面白くないしさ」

「折原には厳しくいくからな」

「それつて、愛のムチかい？」

「あ、愛だと！」

はは、ちーちゃんを弄るのはつても楽しにな。

「教室に着いたよ」

「私が呼ぶまでここで待つておけよ」

「分かつてゐよ」

俺はそこまで子供じやないんだからきつと間はないで欲しいにな。

『げえつ、関羽！？』

教室から一夏くんのバカみたいな声が聞こえてきた。

『誰が、三国志の英雄だ』

やつぱり、あの二人は面白いなそれにこの学校の名簿見た（ハッキング）けど代表候補生が結構いるんだよね。

『入つてこい』

いいところで呼ばれちゃつたな。

「失礼しまーす」

side out

「失礼しまーす」

その言葉とともにに入ってきたのはイザヤだった。

「初めまして、折原臨也です。好きなものは人間なんだよ、趣味は考え中なんだよねえ。スリーサイズは秘密」

なんで、イザヤがここに居るんだ。

「キヤアアアアアアアアアアア？」

耳がいてえええええ！ 何でイザヤは平氣なんだよ！ 耳から何か外したぞ……耳栓してたのかよ！ しかも、こっち見て少し笑つたし。

「かっこいいい！」

「私を苛めて」

「不思議めいでいていい」

周りからイザヤの事を言つてる女子がいるが、最大のライバルが担任にいるんだぜ。

「織斑、何か言つたか？」

「いえ、何も」

危ない、千冬姉に聞かれたら今日が俺の命日なつていたな。

side out

原作であれだけ叫んでいたら、耳栓ぐらいは持つてくるよ。

「俺の席は何所ですか？」山田先生

「ここは、あえて山田先生に聞いて見たひーちーちゃんが凄い田でこ
つちを見てきたんだけど。

「お、折原君は窓際の一一番後ろです」

「ありがとうございますね」

笑顔でこいつ

「／＼＼＼＼＼え、／＼れぐら／＼は」
えつと、こじだつたよね。

「よろしくね、イザイザ」

隣の子はのほほんせんだつたよ、このキャラ好きなんだよね見て
いると楽しいからね。

「よろしく、本音ちゃん」

「何で名前知ってるの～」

「俺は情報屋だからね」

さて、ラウラが来るまでは原作には沿つて行きたくないんだけど、
セシリアだけボコボコにしたいんだよね。高飛車キャラつてこの時
代じゃ古いしね、この際あの性格をどうにかしてほしによね。

「折原、お前はわかるな」

原作だと一夏くんがバカをやつたところだね。

「なんら、説明しましょつか？ ちーちゃん」

「おーりーはーらー学校では織斑先生と呼べー！」

「うわ！ 怒つて、教卓を投げてきたよ。後ろの壁に教卓が突き刺
さつてるよ。

「嫌だなあ、ただのスキンシップじゃないですか」

「そこを動くなよ、臨也！」

ウソだろ！ 何もない空間から打鉄うちがねのブレードが出てくるんだよ

！ あんたは何所のディソード使いなんですか！

「なら、捕まえてござらんよ。ちーちゃん」

窓から脱出して全力で走つてたが、後ろから追つてくる鬼は
ブレードを持ったまま飛び降りやがった。

「ふう、助かったか」

「あれ、なんでいるの～」

「窓の溝に掘まつてやり過いしてんだよ」「

この高さから落ちれば足の骨は折れるだろ？。

「臨也！ む前！」

「無傷だと！ しかも、壁を走っているぞ！ この人外が！」

「やっぱり、ちーちゃんを弄るのは楽しいなあ」

笑いながら廊下を走り安全地帯を探したがちーちゃんに捕つたが無傷で帰還したよ。

「いい運動になったよ」

この時、クラスメイトが思つたのは何で、あんな状況で楽しめるのかだった。

「それと、HISの説明だったね 」「れぐらいは普通に知つてますよ」

「す、すごいですね。先生まだ、そこまで知りませんよ」

「すごいねイザイザは何でも知つてるんだねえ～」

「何でもは知らないよ。知つてることだけだよ」

このセリフは違うアニメだが言つてみたかったんだよねえ。

久しぶり！

楽しい鬼ごっこが終わり、休み時間になつた。

「イザヤ、助けてくれ」

一夏くんは両手を合わせながらお願いをしてきた。

「なら、お金を払つてよ」

俺は手で一を指で示した。

「千円で何とかしてくれ」

「しようがない、今回だけだよ」

「サンキュー」

はあ、なんで君はそんなにバカなんだい。
「ちょっと、いいか」

話しかけてきたのは、篠ちゃんだった。

「久しぶりだね、篠ちゃん」

「久しぶりだな、イザヤ」

「見違えたよ、可愛くなつたね」

「そ、そうか。そつなんだな」

篠ちゃんの顔は赤くなつていた。

「そうだ、優勝おめでとう」

「何で知ってるんだ！」

そこで、大声を出さないで欲しいな耳が痛いよ。

「俺は情報屋なんだぜ、それくらいは知つてるよ

「まだ、お前はそんな事をやつてるのか？」

「俺は外より家で作業する方がましなんだよ

「その割には体力あるよな」

前世の体力がそのまま残っていたなんて言えないしね。

「おや、チャイムが鳴つたから戻ろうか」

「逃げるなよ」

一夏くん、止めた方が身の為だね。

「ほら、担任がちーちゃんだからわ」

その言葉で意味が分かったのか、一夏くんはすんなりと袖から手をどけてくれたよ。

「俺のせいだ殺しかけて」めん

一夏くんはあのやり取りがトラウマになつたんだね。

「俺はあれぐらいじや、死なないよ」

「ごめんな、千冬姉が

パソコン！

「学校では織斑先生だ」

主席簿であんな音がでるなんて、どんなだけ力が強いんだよ。

「折原、いらんことを考えるなよ

鋭い目でにらんできた。

「どうしたんだい俺を見つめて、何かついてるかいちーちゃん

「み、見つめてどいない」

また、赤くなつた熱でもあるのかな？

「俺は少し、しんどいんで保健室に行きます」

ウソだよ、授業なんて受けなくともできるもん。

「そうだな、いつて来い」

さてと、廊下に出たけどどこに行こうかな。

「ねえ、そこの君今は授業中だよ」

黄色いネクタイをしているから一年だらう、つてあの顔は樋無さんじやないか。

「やあ、生徒会長の更識樋無ちゃん」

平然と答えてみた。ここで、変な行動したらすぐばれるからな。

「初めてで、折原臨也くん」

俺たちは向かい合いながら微笑んだ。

「ちょっと、来てくれるかな

「ようこんで」

樋無ちゃんについていくと生徒会室の中まで案内され、扉の鍵を閉められた。

「なんで、鍵を掛けるんだい」

「あなたに、依頼したいの」

更識に仕事をもうが更識の人間がしてくるとは意外だな。
内容によるかな」

「織斑一夏の秘密を調べてくれるかしら」

「20万で手を打とうかな。それが、妥当だと思つんだけど」

「分かつたわ」

契約は完了した、俺の仕事が終わるまでは油断ができないな。
「疲れたよ」

「それじゃ、お茶を飲みましょつよ」

「いきなりゆるくなつたからついていけないな。

「それじゃ、食堂にでもいこうか」

俺は紳士がエスコートするみたいに右手を差し出した。

「あ、ありがとう」

なんだか、フラグをこの頃立ててるよう思つるのは氣のせいかな?

「そうだ、俺を生徒会に入れてくれないかな?」

「いいわよ」

即答された、本当にこの人は頭が良いのか?

「それなら、役職は何かな?」

「あなたの実力なら、副会長だとおもつわよ」

「なら、これからは授業をサボる為に生徒会室を使わせ貰うよ
放課後も来てもらわないとダメよ」

「それでも、この人からは危ない感じがしないな。

「それじゃ、君の顔を見に来るよ楯無ちゃん」

「／＼／＼お願ひね」

その後も、話しながら食堂に行き、お茶を楽しんで教室に戻つたら篠ちゃんとちーちゃんに殴られたよ頭を俺はないかしたかな?

部屋に行つてみようか？

放課後、俺はなんとなく一夏くんの家庭教師をしていた。

「これぐらいなら、分かるかい？」

俺はISの簡単な資料を見せながら言った。

何となく

おおい、それは勘弁してくれよ」

今見せているのは、さりでも分かる簡単工芸の知識で、なんでもあるものがあるかつて。そんなのは簡単だよ。最初から二つなる事は分かつていたからさ。

何で 僕はあれを捨てたんだ

「そ、うなんだけど、イヤヤに言われると傷つくな

樂しけな

「またいたんですね。よかつた」

「どうしたんですか？」

『おのづかの鎌を渡しに來ました』

「お前のは無理に調整して、寮の最上階にした
俺の部屋は何所ですか？」

「さすがに『ちゃん』俺が好きなど『JN』を知ってるね」

「折原は人の下に處するのが嫌いだ。

「子供みたいですね」

俺は性格は子供なんですよ

「いや、俺は部屋に向かうよ

さて、鬼の先生から早く離れよ!」

「道草しないでくださいね」

「この距離でできる訳がないでしょ。」

「それにも俺の部屋はどれくらい広いのかな」

ドアノブを回すと開いていたので入ると田の前に現れたのは。

「お帰りなさい、お風呂にする、それともご飯、それとも私?」

田の前に裸エプロンの楯無ちゃんがいた。たぶん、水着を着てる

よね。

「それじゃ、どうしようかな」

ドアを閉めて鍵を掛けた。

「よし決めた。君にしようかな」

俺は楯無ちゃんを押し倒して馬乗りする。

「え!」「

楯無ちゃんはいきなりの事で驚いていた。

「君が誘つたんだよ。やめなんてしないからね」

俺は微笑みながら言った。

「／＼／＼／＼」「

楯無ちゃんは田を閉じた。

カシャヤ!

「良い顔が撮れたよ

俺の手にはデジカメがあつた。

「覚悟して損した」

「可愛い顔してたよ

「け、消して／＼／＼

凄く照れていて可愛いな。

「なんで、ここに居るんだい?」

俺はまだ、馬乗りの状態で聞いてみた。

「生徒会長の特権で相部屋にしてみました」

だから、お風呂があり、トイレがあり、台所があるととても便利な

部屋なんだね。

「これからよろしくへ

微笑みながり言つた。

「それより、どうしてくれなー?」?

「嫌だよ、今日は疲れたからこのまま寝ようかな
耳元でさわやいてみた。

「ひやあー!」

「さて、ベットで続きをしようか

俺は楯無ちゃんをお姫様抱っこをした。

「本当にするの?」

「するわけないじゃん。だって、俺はまだ18歳だからね

「何歳ならいの?」

「満18歳」

「今何歳なの?」

「永遠の18歳だよ

「おかしくない」

「おかしくないよ、18つたら、18歳なんだよ

永遠の18は俺のだけが使っていいんだよ。

「さて、寝ようかな

「別々に?」

「一緒に寝たかったら、寝たらこよ」

この夜は楯無ちゃんと一緒に寝ました。

クラス代表？

俺は朝起きるとすぐお着替え食堂に行つた。なぜなら、昨日は変なティーションでいろいろやつてしまつたからな。

「おはよっ」

俺が挨拶したのは篠ちゃんと一緒にいたよ。

「おはよう

「おはよっ」

なんだか篠ちゃんの機嫌がよくないな。

「一夏くん、何かあつたのか？」

俺は一夏くんの耳元でささやいた。

「昨日からああなんだ」

「一夏くん何かしたのかい」

「部屋に行つたら、バスタオル姿の篠が出てきたんだよ」

「諦めて警察に自主しようか」

「覗きじや、ないから」

忘れてたけど俺の格好は昨日と一緒になんだよ。

「それにしても、何で制服じやないんだ」

「皆と同じ服なんか着たくないから」

「その格好、小学生からかわつてないな」

「そうだね、中学は行つてないからね」

「まじかよ」

「池袋に居た時は情報屋の仕事で大変だつたんだよ、それに妹達と

同じ学校に行くなんて嫌だからね」

「お前の妹嫌いは治つてないな」

「妹なんて俺にとつて邪魔な存在だからね。」

「それより、チャイムが鳴る前に教室に行こつか

「気づいたらあと五分で予冷がなる前だつた。

「今からSHRを始める前にクラス代表を決める、誰か立候補しろ」

ちーちゃんのその発言を俺は待っていた。

「一夏くんが良いと思いまーす」

「それがいいね~」

本音ちゃんも賛成してくれた。

「なに、それなら俺はイザヤを推薦する」

「良い度胸だね、一夏くんが俺に勝てるでもいっのかい?」

「生意気言つてすみません」

一夏くんは魂がこもった土下座をした。

「折原と織斑の二人だけか」

「納得いきませんわ」

来たか、高飛車アホ女！　君が名乗り出ることを俺は待っていた！　俺は君のその自信に満ち溢れた慢心な心をぶち壊したくてしうがなかつたんだよね。原作読んでいて近接が弱いの攻撃していくようなバカにはいい薬だが、俺は人の心を折るのが最も楽しい遊びなんだよ。

その間もセシリ亞と一夏くんの言い争いになつていた。

「それなら、俺は君の心を折ろうかな」

席から立ち、どこからかナイフを右手にもつた。

「勝負は来週の月曜日だ。折原、ナイフを早しまえ

「何言つてるんですか、これはISですよ

「え！　折原君はもう専用機持つてるの」

「俺はとっても信頼しているISの技術者を知つてゐるからね」

一応このISは束ちゃんが製作した、第四世代のISなんだよね。

「これで、君と俺は同等じゃなく、俺の方が強いよ高飛車さん」

「私だって専用機を持っていますわよ」

「その話じやないよ、俺が言つてるのは君と俺の力の差だよ

「何言つてるの折原君、男子が強いには世の話だよ

その言葉を聞いて俺は笑い出した。

「アハハハハハ、俺は他の人に下に見られるのが嫌いなんだよね。だから、そんな意味が分からぬ事はぶち壊したくなるんだよね」

「いいですわ、あなたのその自信を壊してやりますわ
「やってみよ」

「これは来週が楽しみだな、クラス代表の件は生徒会の仕事が大変
やらでバスすればいいしね。」

「楽しみに待つていいよ」

そのまま、休み時間に入った。

「一夏くん、頑張れ」

「お前もだろ」

「俺は勝てるから良いんだよ」

「はあ、俺はどうしようかな」

「篠ちゃんに剣道でも教えて貰つたら?」

「なんで、そこで私が出でくる!」

いつの間にか後ろにいて驚いたよ。

「教えてくれないかな、篠ちゃん」

いつものように耳元で囁いた。

「イザヤが言うのなら仕方がないな」

「やリ! これで、すべての物語が俺の手のひら操れるな。」

試合は迅速に行わぐれ（前書き）

そろそろ、前期末テストなんだよね。赤点採つたら留年決定なんだよね。

「勉強したらどうなんだい」「するよ、保健と製図だけ。

「なんで、保健なんだい」

保健しか点が取れないから？

「前回はなんてんだつた？」

満点に決まってるじゃないか？

「变态だね」

残念だがそこが今回のテスト範囲なんだ！

「誰か、作者に勉強をするように説得してくれだが、断る！」

試合は迅速に済つべき

セシリ亞ちゃんと一夏くんの試合が終わった。なに、時間の進みが早いつてそんなのきまつてゐるじゃないか！ 男の練習風景を見て喜ぶ男子がどこに居るんだ！

「お前はバカだな」

ちーちゃんは一夏くんを苛めているよ。

「ちーちゃん、暇だから先に行つて準備していいかな？」

「そうだな、オルコットは装備の補給があるからな」

俺はすぐさまISを展開しアリーナに行こうとした。

「それが、イザヤのISか」

俺の格好はいつもの服の上に黒く薄い装甲が纏つてているだけだ。

「それにしてもそれがISスースなんて」

「この格好が落ち着くからね」

特注品なんだよ、それは置いといて早くアリーナに行こう。

「アリーナに来たけど何しようかな」

まずは、武器の確認『影』だけだった。それにこの武器は色々な形状になる事が出来るみたいだ。

「楽しい事を始めようかな？」

何をしたかは、戦闘が始まつてからのお楽しみだよ。

「これで、配置は完了したね」

「待たしましたわ」

うわ！ 高飛車が現れた。イザヤの行動は戦いを始める。

「待たせないでくれよ」

俺は影をナイフの形状にして構えた。

「そんな武器で勝てると思つていいのですか？」

「勝てるぞ」

ブザーが鳴つたとともにセシリ亞がスタートマークを構える
がそれは撃つ前に粉々になつた。

「どうしたんだい？」
「その武器は見せかけかい？」

「これだけではありませんわ」

ブルーティアーズを飛ばしたがそれもイザヤを撃つとした瞬間に爆発した。

「何が起きましたの?」

「それで、お終いかい？」

「でも、まだですわ！」

近接武器を出した瞬

「あ、まだですか」

「いや、敵の武器は黒くなつた」

トギヤな黙識の井のは笑本格アカヒ

「何をしたんですか

「一九〇六年」

ウラガタリノカミ

「このアリーナ一帯に細い糸を張つたんだよ」

イザヤが指を鳴らすとアリーナに見えてい

現した。

「そ、
そんな」

「これで、俺の勝ちだね」

「サヤは出来ないセシリアを地面に向かって投げ 返くまで

きて呑した

二正（を新）一取未こする

そう言いながら、イザヤは片足を高くあげ踏む体制を探りそのまま

ま足を下に下した。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハ

その姿はまるで子供が無邪気に遊んでいるような声だった。

「アハハハハハハハハハハハハハハ……飽きちゃつた。

「止めよ！」と踏み潰す趣味はもう止めよう。

イザヤの行動が止まつたのはいいがセシリアのエスはほとんどが

壊れていた。

「君じゃあ俺の快樂にはならない」
その言葉を吐き、ビットに戻った。

「ただいま

「やりすぎだ！」

一夏くんの声が聞こえてきた。

「今度は一夏くんが俺の快樂を満たしてくれるのかい？」

「あれは何だ！」

「うるさいな、俺は普通に戦つただけだよ」

「お前は加減が出来ないのか」

「手加減は無しだからね」

「やつぱりお前はおかしい！」

これでいい、俺は初めから君とは相性が悪いからね。それに、この性格は君が最も嫌いな性格だからね。だから俺はこの性格のままで生きてきたんだよ。

「それじゃ、俺は部屋に戻るよ」

そのまま寮に帰りたっちゃんで遊び寝た。

遊びはゆづくつ

「クラス代表は織斑一夏に決まった」

「なんで、俺なんですか？」

一夏くんは驚きながらちーちゃんに聞いた。

「それは、オルコットのHSは修理に出しているからな」

「なら、イザヤなら」

「俺は生徒会で忙しいからバスしたんだよ」

「なんだと！」

だつて、俺はめんべくさいのはバスなんだよね。

「それじゃ、俺は生徒会の用があるから失礼します」

教室から出て、向かつた先は生徒会室ではなくHS整備室に向かった。

「ここに、彼女がいるのか」

さて、ここから俺がHSの物語を壊していくつかー！

「こるかい、更識簪ちゃん」

俺は部屋に入り女の子に話しかけた。

「……あなたは誰？」

「警戒しなくていいよ。俺は折原臨也、君の恨みの対象を嫌つてい
る人物さ」

「……恨みの対象？」

俺は微笑みながら言った。

「織斑一夏……」

その言葉は静かに整備室に響いた。

「……用は何？」

「君に今度、行はれるクラス対抗戦に出て貰おうと思つんだよ」

「……まだ、HSは出来ていない」

「その点は問題ないよ。ここに俺が各国のHS情報をクラックして
纏めた物を君にあげるよ」

俺はそのままJSBを彼女に渡した。

「……なんで、くれるの？」

「俺は一夏くんの事が大っ嫌いなんだよ。だから、君に手伝つて欲しいからね」

「……自分でしないの？」

「クラスが一緒だから出来ないいんだ。それに、俺は君に興味があるからね」

「……興味？」

「そうだよ。俺は君がたっちゃんの妹だから日本代表候補生になつたとは俺は思はない、それは君が手に入れたものだと俺は思つ」

「……私の実力？」

「そう、君の実力だよ。だから、君の力を俺に貸してくれないかな」

俺は手を伸ばしながら言つた。

「俺には君の力が必要なんだ」

「……そんな事、初めて言われた」

「力を貸してくれるかい？」

「うん……」

「それじゃ、ようじくね、簪ちゃん。俺の事はイザヤって呼んでいいから」

「わかった……イザヤ」

「俺と君は同じ目的をもつた仲間だよ」

「仲間……」

「俺もJSを作るのを手伝つから必要な時にここに連絡をいれなよ
俺は連絡先とチャットのJSR-Lを渡した。

チャットルーム（深夜）

甘楽さんが入室されました

《甘楽さんのアイドル甘楽ちゃんが帰つてきましたよ》

『どうにかならんのかその口調は』

「お帰り～寂しかったよ」

《「(+)最近忙しかったので来れませんでした」》

『いいから、その口調をどうにかしろー 虫唾が走る』

《酷いなー鬼さんは怒りん坊さんなんですか?》

情報さんが入室されました

《新顔さんだね。はじめまして》

(初めまして)

「初めまして~」

『初めてだな、私は忙しいから落ちたる』

鬼さんが退室されました

《あの人ほつといて、ガールズトークを楽しみましょうよ》

「甘甘、やっぱその口調は変だよ】

(甘楽さんの性別はどうなんですか?)

「男だよ】

《違いますからね、ウサギさんウソを教えないでください》

(面白いですね)

「(+)ねがいのチャットのたのしむところだかね~】

《ウサギさん、漢字に変換してくださこよ。読みこくこです》

(そうですね www)

「酷いよ、私だって忘れる」とだつてあるんだよー。怒ったから今

日は帰る(怒)】

ウサギさんが退室されました

《ほとんど帰つたので私たちも落ちましょうか》

(すいません)

《謝らないでください》

情報さんが退室されました

甘楽さんが退室されました

「物語は俺の手で作りえるよ」

「どうしたの?」

「これから、楽しい事がはじめるかね。たつちゃん」

微笑みながら言った。

「どんなことかしら」

「とても、楽しい事だよ」

「それは楽しそうね」

それはとても楽し楽しい原作崩壊の第一歩だよ。

作戦は計画的に（前書き）

皆さんのおかげでお気に入り件数が3桁になりました。とても嬉しいです。

作戦は計画的に

今日は簪ちゃんの所に遊びに行こうかな。

「ISの出来はどうだい？」

「ギリギリできるか分からない」

簪ちゃんはディスプレイから目を離し、ちらを向いた。

「別に今回が駄目でも学年別トーナメントがあるからゆっくりと作つていこうか」

「何とか間に合わせてみせる……」

「なら、この情報は持つてきて正解だったかな？」

俺は資料を簪ちゃんに渡した。

「こんなことして…大丈夫かな……」

「大丈夫、それは俺が信頼する人からもらつた物だから」

そう、頭のネジが何本か抜けた人にね。

「なら、頑張る」

「そうだね。あと、数日しか無いからね」

最近、一組に転校生が来たとか言っていたな。俺には全く関係がないし、ただの中国代表候補生なんていっても、いなくても変わらないからね。

「イザヤも手伝った」

「いいよ。それに、俺が頼んだことだからね」

俺が手伝う頃にはほとんどが完成していて、原作よりも早くできるのではないかと思った。

「……あのデータすごく役にたちました」

「クラックしたかいがあつて良かつたよ」

「本当に私で良いんですか？」

「自信が無いのかい？」

計画に支障がない程度に頼むよ。それに、近頃ドイツからあの子

が来るからね。

「……少しだけ」

「大丈夫さ、君ならやつてのけるつて信じてるから」「あ…ありがとう」

「簪ちゃんの顔は少し赤かつたけど、この部屋つて暑いのかな。さて、早く完成させて試験動作をしないとね」

「試験動作をしないどこのがダメなのか全くわからないからね。あと数時間で完成する」

「やつぱり、この子に頼んで正解かな。俺はアリーナの貸切を教師に頼みに行こうかな」

「俺はアリーナの貸切を教師に頼みに行こうかな」「出来るの?」

「出来るわ、俺は生徒会副会長なんだよ」「せ、生徒会!?」

「お姉さんのことが引っかかるのかな。安心しなよ、俺は君を裏切らない」

「俺は静かに整備室から出た。

「……あの人はとっても優しい」「簪の声は整備室に静かに響いた。

「どうしたんだい? たつちゃん」

「整備室からでたら、たつちゃんがいた。

「一夏くんの資料をもらいにね」

「忘れていたよ、コレが彼に関する資料だよUSBをたつちゃんに手渡した。

「お金の方は口座に振り込んでおいたから」

「俺は用事があるから行くよ」

「じゃあまた部屋で」

「俺は職員室に行くとちーちゃんに怒られた。

「なんで、お前は授業に出ないんだ!」

「面倒だから?」

「なんで、疑問形なんだ!」

「怒るなよちーちゃん、怒ると婚期逃がすぜ」

「よ、余計なお世話だああああああああああああああああ…」

「怒りながら教師用の机を投げないでくれよ」

「当たると死んじゃうよ。

「イザヤ…」

「第一アリーナに借りるから誰も入れないだね」

「逃げるなー」

「聞こえない。なにも聞こえないなー

「準備は出来たかい」

「今、出来た」

帰った時には準備までできていた。これはさすがに驚いた。

「さて、試運転に行こうか」

第一アリーナに行くと三人の影が見える。

「そこの三人すまないけど、出でくれないかい」

「申請している人がいたんですかすみません」

誤ったのは一夏くんだつた。

「今から忙しいから早くしてくれよ」

「つて！ イザヤかよ」

そこで驚かれて困るよ。

「何をするのか」

篠ちゃんが話しかけてきた。

「今からエラのテストをするからね」

丁度その時、篠ちゃんが来た。

「ほらね」

「でも、ここは私たちが先に使っていたのですわ」

セシリ亞が何か言つたがこんな負け犬に構つている暇はあまりないから早く出でもらうか。

「負け犬は静かにしといてくれないかな？ それに、ここじゃなくても練習は出来るんだし」

「その言い方は無いだろ、イザヤ」

「五月蠅いな、俺はそこの負け犬には全く興味が無いんだよね。て

が、見ているのが嫌なんだよね見苦しい」

「イザヤ、言い過ぎだ」

「言い過ぎ? 何言つてるんだい、敗者は勝者に従つのがルールじやないか」

「なら、今から俺と戦え! 負けたらセシリアに謝れ」

「しようがないな。簪ちゃん、三分钟だけ待つといてくれるかな」

一夏くんはすでにISを纏つて戦闘態勢に入っていた。

「面倒くさいな」

俺は瞬時にISを纏つた。

「始めようか」

今回は『影』を大鎌に変えた。

「それで勝てるのか?」

「戦闘中に敵に話しかけるもはいけないな」

俺は大鎌を振るつた。

「そんなもの」

一夏くんは雪片式型で受け止めようとしたが……

「それは、無駄だよ」

大鎌は雪片式型をすり抜けた。

「なに!」

「終わりだね」

一夏くんはアリーナの壁に激突した。

「さて、敗者は速やかに退場してもらおうか」

簪ちゃんがこちらに近寄ってきた。

「今のはなんだ」

「俺の武器は『影』なんだぜ、すり抜けるぐらいは当たり前だね」

「なぜ、そこまでする

「力の差を見せるため?」

「昔のお前はそんな感じなかつた」

「それより早く出でくれよ、田障りだ」

これでやつと試運転ができる。

「あれでいいの？」

簪ちゃんは近寄り呟いた。

「心配してくれてありがとう」

打鉄式式の試運転は成功に終わり後は武装の細かなチェックだけになつた。

「これで俺の作戦は上手くいく

「手伝つてくれて……ありがとう」

「これは君の力で作つたんだ。俺は何もしていない、また明日俺は笑いながらアリーナを後にする。

やつやめはい注意トセーー（前書き）

テスト一週間前になつたので投稿するのが遅くなります。

やつあれまじ注意トセー！

それにしても、世界は詰まらな。俺はもっと樂しい世界が見たいな。

「イザヤ、準備ができた」
簪ちゃんは打鉄式式を纏っていた。

「これで、君の実力を見せる舞台が整つた！」
俺はアリーナの外で喜びながら叫んだ。

「さて、この戦闘を否定しようか！」
上空からアリーナに砲撃が降ってきた。

「行こうか、簪ちゃん」
「……うん」

俺はISを展開しアリーナの壁を壊しながら進んで行った。

「脆いなこれじゃ直ぐに侵入されるよ」

アリーナの最後の壁は少し固かつたが呆氣なく壊れた。

「簪ちゃん、俺がサポートするから楽しんできなよ」

簪ちゃんはゴーレムにミサイルを撃ち込んだ。

「何にきたんだよ、イザヤ」

一夏くんが寄ってきた。

「何つて、遊びにきたんだよ」

「ふざけてるのか！」

「ふざけてないけど？」

「じゃあなんであの子が戦つてんだよー」
一夏くんは簪ちゃんを見ながら言った。

「お前は何もしないのか」

「これは、簪ちゃんの自信をつけん為の戦闘だ。俺は今回は傍観に徹するぞ」

簪ちゃんはゴーレムに今は勝っている。

「さて、簪ちゃんは頑張ったし、これでいいだね！」

俺は『影』を針状にしてゴーレムの手足に突き刺し地面に屈服させた。

「君は無人機なんだよね、ならこれぐらいの事はいいよね」

俺は『影』をギロチンにかえゴーレムの首の所にセットした。

「バイバイ」

ゴーレムの顔は宙に舞つた。

「人間だつたら楽しいだろうね」

その声はISに乗つている者にしか聞こえなかつた。

「帰ろうか、簪ちゃん」

そのままアーリーナを後にした。

「頑張つたね。簪ちゃん」

「い、イザヤのおかげです」

簪ちゃんは誉められたのが嬉しいのか頬を赤く染めていた。

「作戦は順調に進んでいるね」

「作戦？」

「とつても愉快な作戦なんだよね。今は秘密だけど」

俺は寮の屋上に足を運んだ。

「誰もいないね」

俺は携帯を取り出し電話をかけた。

『楽しかつた？ イザくん』

『微妙かな、束ちゃん』

『酷いな、愛しのイザくんの為に頑張つたのに』

『それは感謝してるよ。作戦は順調だね』

『そうだね、彼女も待ってるよ』

『彼女は危険だからね。それじゃあ、作戦を第一段階に移行しよう

か

『了解(、ヽ、ヽ)』

『それじゃあ、エル・プサイ・コングルウ』

俺は携帯を切りまた、電話をかけた。

『何のようだイザヤ』

「怒らないでくれよ自称魔法少女ちゅん

『だれが、自称魔法少女だ！』

『もう、何も怖くないだつけ？』

『それは、違うアニメだ！』

『君の声を聞いて安心したよ』

『／＼／＼いきなりなんだ』

『君を使うのは第二段階からだよ、マドカちゅん

『それだけの為に電話したのか』

『いけないかな？ 自称魔法少女ちゅん』

『だから私は自称魔法少女じゅなー。』

からかいがないがあるから楽しいな。

「また、かけるよ」

電話を切り自室に戻った。

「遅かったね、イザヤくん」

部屋に戻つたらシャツ一枚のたつちゅんがいた。

「今日は楽しめたよ」

「田をつむるのは今回だけよ」

その顔はいつもの顔ではなく生徒会長としての顔だった。

「それは困るな」

俺はたつちゅんの顎に手を添えキスをするような格好になつてい
る。

「一応、イザヤくんも生徒会なんだから」

「わかってるよ」

「あなたの狙いはなー？」

「今は君の心かな？」

「真面目に答えて」

「これが、答えだよ」

俺はたつちゅんの唇にキスをした。

「それは、本当のキス？」

「俺は特別好きな人じゃないとしないな

「あと、何人居るの？」

「今はまだ五人かな？」

「増えるの？」

「俺の愛がある限りね」

そのまま、ベッドに移動した。

PV6万アクセス記念（前書き）

今回はこの話を作る際にできたストーリーを載せました。人気があればこれを新しく投稿するつもりです

PV6万アクセス記念

初めまして、森野亮士っス。今回はPV6万記念で作者がこの作品を作った際にできたボツ作品を番外編を使ってもらうことになつたつス。

では、『もし、IIS学園に亮士くんが来たら』っス。

神様に人生をやりなをさせもらつているんだが、よりによつてオオカミさんの亮士に生まれ変わつてるんだ。編入先がIIS学園なんて。

「待たせたな」

そこに現れたのは織斑さんでしたス。

「お、お久しぶりです、織斑先生」

「久しぶりだな、森野」

一応、小学校まで一夏さんと同じ小学校に通つていたんスよ。

「ひい！ 見ないで下さいっス」

「治つてないのか、まあいい時間が押しているから行くぞ」

俺はビクビクしながら千冬さんね後ろをついていつたつス。

「ここがお前の教室一組だ。私が合図したら入つてこい」「はいっス

千冬さんが教室ですごい音がした。

『何するんだよ、千冬姉』

『織斑先生と呼べ』

また、すごい音が聞こえ俺は一夏に向かつて合掌した。

『今日、編入生が来た。入つてこい森野』

俺は教室に入り教壇に立ち挨拶をしたつス。

「は、初めまして、森野亮士です。趣味は特にないっス」

『『『ジツー』』』

「いいやああ～見ないで見ないでつー！見ないでほしいつス！」

「！」

「意外に可愛いかも」

俺の平穏はどうなるんつスかああああああー！」

転校生で遊ぼつか？（前書き）

絶対やせても、りこめました

転校生で遊ぼうか？

今日は学園の方に登校しますよ。なんでって、ほら今日は一人の転校生が来るからじゃないか。

「遅れました」ちーちゃん

遅れた理由は女子の騒ぎ声が聞きたくなかったから？

「イザヤ！ 今何時だと思つていい」

主席簿を投げられ頭に直撃した。

「痛いじゃないか、ちーちゃん」

俺は頭を抑えながら席についた。

「珍しいね、イザイザがクラスに顔を見せるなんて〜」
のほほんさんが笑顔で話しかけてきた。

「なんだか、面白いものが見れそうな気がしたから」

「イザイザの予想は当たるもんね」

「パアーン！」一夏くんがラウラちゃんに平手をされていた。

「デュノアの面倒は折原と織斑に任せせる
さて、俺は逃げる準備を始めるか。

「頑張つてね、イザイザ」

「まあ、頑張るよ」

一人で教室を出ようとすると。

「イザヤ、一人で逃げるなよ」

一夏くんの手が肩に置かれていた。

「これは、新手のビックリかい？」

「逃がさねえぞ」

結局、三人で更衣室に目指すことになった。

「俺は面倒ごとは嫌いなんだから」

「嘘をつくな、事件の中心にはいつもイザヤがいただろ」
廊下を曲がろうとしたら一人の女子生徒に出会った。

「者共であえー」

「しょうがない、」Jは一夏くんをおどりに使つが。

「シャルルちゃん、舌を噛むなよ」

俺はシャルルちゃんをお姫様抱つて抱え女子軍団の前まで行き叫んだ。

「生徒会副会長が命じる！ 俺とシャルルちゃんを全力で通せ！」

「Y e s , m u l t i o n d ! 」「」

真ん中に道ができ、そこを走りながら呟いた。

「一夏くんは通さなくていいよ」

女子の目は獲物を狩る獣の目だった。

「さて、時間もたっぷりあるからお話しようか。シャルロット・デコノアちゃん」

更衣室にその声は静かに響いた。

「何で、その名を知ってるの」

シャルロットちゃんの顔は青くなっていた。

「俺が折原臨也だから」

「あなたが、情報屋のですか」

「俺のこと知ってるなんて、嬉しいな。これが、君が欲しがってる物だよ」

俺はUSBを取り出し見せつけた。

「欲しいかい？ 白式、甲龍、ブルーティアーズのデータが
シャルロットちゃんは頷いた。

「あげるよこらなーいし」

俺はUSBを投げた。

「あなたは彼らの友達じゃないの」

「なんで、俺が一夏くんの友達になるのかないらつくよ」

「あなたは何がしたいんですか？」

「いいのかい、コレを聞くと君は俺の監視を受けることになるよ」

「止めて置きます」

「でも、俺は君に興味を持ったからようじぐ。イザヤって呼んでいいよ」

「わかりました」

「敬語なんてやめてくれよ。それより行こうか、ちーちゃんは怒る
と怖いからさ」

シャルロットはイザヤは優しい人なのかなと思った。

鬼の出現？

「シャルルちゃん、俺眠るから何があつたら起^{ハシ}してね
だつて、アリーナつて面倒じやないか。

「僕は知らないからね」

それでも寝かしてくれるんだね。

スコン！

「何するんだよ、ちーちゃん」

頭を抑えながら言った。

「私の授業で寝るからだ。それに織斑先生だ」

「いや、ちーちゃんはちーちゃんじゃんそれ以外に呼び名つてあつたけ？」

「怒りたい所だが、今から凰、オルコットが射撃の訓練の実践を行
うから見ていろ！」

「負け犬対先生か、楽しそうだな」

「誰が、負け犬よ！ 私はまだ、誰にも負けてないわよ…」
おチビちゃんが叫んだ。

「今回、負けると俺は予想するよ」

「あんた昔から変わつてないわね」

「変わる方が珍しいよ」

「早く始めんか！」

「俺は戦闘が終わるまで、ちーちゃんをいじろうかな？」

「怒ると小じわが増えるよ、ちーちゃん」

「イザヤー！ 今日は許さん」

ちーちゃんは打鉄のブレードを持って襲ってきた。

「それが当たつたら、俺が死んじやうじやないか」

「死ね！ 生憎ここは法律を無視できるからな」

「が本気なんですけど。

「そろそろ、戦闘が終わるよ」

「知るか！ 今はお前を殺ることが優先だ！」

危なくなつたら『デュラハン』を開いたらしい。

「覚悟！」

『デュラハン』を開いた後、水がブレードを受け止めていた。

「助かったよ、たつちゃん」

イザヤの後ろの方から『ミステリアス・レイディ』を開いていたつちゃんが現れた。

「死なれたら、おねーさん悲しいから」

「授業はどうした、更識」

「好きな人を守るために理由なんて必要ですか？」

「二人とも戦闘体制に入った。」

「山田先生、授業を再開しましょうか」

「えつ、ほつとていいんですか」

「時間がもつたいないじゃないか」

「今日はISの起動と動作をしてもらいます。主席番号順に専用機持ちの所に行つて下さい」

「俺のところに篠ちゃんがいるな、何でだら。」

「さて、やううか」

「「「「はい」「」」」

「俺は素直な子は大好きだよ」

ニコリ微笑んだ瞬間、折原に女子は赤面になつた。

「次は誰かな？」

「私だ」

「篠ちゃんか、ISが立つたまま降りたから連れて行つてあげるよ」
お姫様抱っこで運びます。

「イザヤ、久しぶりに屋上でお昼と一緒に食べないか？」

「いいよ」

「本当か！？」

「嘘はつかないよ」

そのまま毎休みになつた。

「なぜ、こうなる」

俺の周りにはたっちゃん、簪ちゃんがいて一夏くんハーレムがいてシャルルちゃんがいます。

「何で、お姉ちゃんが居るの？」

「簪ちゃん、恋は姉妹だろうと手加減はないよ」

この場に新しい修羅場ができていた。

「姉妹は仲良くしないとwww」

イザヤは笑いながらお皿を過ごした。

俺について、話をじょうぶか（前書き）

明日、基礎製図検定なんだよね

俺について、話をじょうか

「さて、今日はたつちやんは忙しくて居ないみたいだし何しようかな？」

「コン、コン！ イザヤの部屋に誰かが来た。

「誰かな？」

イザヤはゆっくり扉に近づき扉を開けた。

「どうしたんだい？ 篠ちゃん」

扉の開けた先には篠ちゃんが立っていた。

「い、イザヤ！ 今度行われる学年別トーナメントで優勝できたら、付き合って欲しい！」

「それは、男女の仲になりたいってこと？」

篠ちゃんは頷いた。

「優勝できたら、付き合つてあげるよ」

「本当か！？」

篠ちゃんはイザヤの両肩を掴みながら言った。

「本当だから離してくれないかな、骨が軋んでいるんだけど」

イザヤの両肩からミシミシと鳴っていた。

「嘘じやないな」

「お願いだから、離してくれないかな？」

「す、済まない」

イザヤは両肩を動かし異常がないのを確認をした。

「この学園はある意味、怖いな」

「何か、言つたか？」

「いや、なにも」

余り、凶暴なことは伏せておこう。俺の命が足りないな。

「それだけかい？」

「あと、今のイザヤの事を聞かせて欲しい。何で、お前はそこまで歪んでいるんだ？」

今の俺は折原臨也を演じている人だからな。

「それは、君には関係がないことだよ。好奇心は猫をも殺す、だぜ」「それでも、私は聞きたい。今のお前は何であんなに酷いことをするんだ」

今はまだ（・・）話せない、篠にこの話をするのは時期が違う。「こつなけらなければ俺は俺という人物を消していただくらいかな」「意味が分からぬぞ！」

「意味が分からなく言つてゐるんだよ」「私は今のお前が分からぬ」「それで、やつきの約束するんだい」「お前の隠してゐ事を聞くためだ

「頑張つてくれよ、俺は篠ちやんも好きだからね。応援をしている
よ」

俺は扉を閉めて篠ちゃんとの会話を自分で止めた。

「あんな事を聞いてくるとは思わなかつたな」

今日はイザヤらしくないな、たまには自分らしく生きてみようかな。いや、俺はあの日決めた筈だ、自分を捨てて。

「イザイザ居る~」

「この声はのほほんさんかな。

「どうしたんだい、のほほんさん」

「暇だつたから遊びに來たよ」

無邪気に話しかけられ少し安心した。

「どうしたんだい？」

「イザイザがつらそうだったから慰めに來た」

「辛そう?」

「そうだよ、いつもより辛く見えたから」

「君はすごいね。でも、俺は辛くないから心配しないでいいよ」「たまには、本音を言わないと疲れるよ」

俺は驚いた、何ヶ月しか接していないのに今まで知られるとは思わなかつたな。

「それじゃ、俺と話をしないか?」

「いいよ~」

彼女を部屋に入れ椅子に座らせた。

「俺はある小説の主人公が嫌いだつたんだ。誰からかの気持ちに鈍く自分を守つてる様に見えて嫌いだつたんだ。それに似た人物を傷つけるには今の性格になるしかなかつた、これのお陰で人を騙すことに悪意が感じなくなつたんだ。俺は人を好きになるしかなかつたんだ、人が俺のこと好きになるにはこれしかなかつたんだ」

「大変だつたね」

「俺はこのまま過ごしていいのかな?」

「イザイザの好きなようにすればいいよ」

「話を聞いてくれてありがとうね」

俺はお礼をし話を終わらうとした。

「本音が言いたかつたら、いつでも呼んでね。私はイザイザが好きだから」

その言葉はイザヤではない、今の俺にはとっても嬉しいな言葉だつた。

「今俺は君が一番好きだよ」

「ありがとね。できれば、もう一人のイザイザも好きになつてくれてもいいよ」

「それには、好感度が足りないかな」

「酷いな~」

「俺の方は気に入った人間しか好きになれないんだよ」

久しぶりに自分を出せたのはとても楽しかった。また、自分を出す日が来たらいいな。

イジメは嫌いなんだよね（前書き）

PV10万記念でイザヤとヒロインとのデートを書きたいのですが、
そのヒロイン一人だけを皆さんに決めてもらおうと思います。
なのでこの中から選んで感想に投票して下さい。期限は10月6
日までです。

ヒロイン

束さん

ちーちゃん

山田先生

楯無さん

簪ちゃん

のほほん

シャル

ラウラ

マドカ

の中から選んで下さい。お願いします。

イジメは嫌いなんだよね

さて、今俺は暗い部屋に監禁されました。なんで、監禁かってそれはね。

「授業面倒だし、久しぶりに池袋に行こうかな。たしか、今日はラウラちゃんが代表候補生の一人をやる日だつたね」
正直面倒だ、久しぶりには俺を楽しみたいんだよね。

「どこに行こうとしている?」

俺の後ろには怖い鬼さんが降臨していた。

「無断外出かな?」

「ほお、私の授業をボイコットして遊びに行くとはな
「まだ、門をでていないからセーフ?」

そろそろ、走る準備をした方がいいな。

「今日は逃がさんぞ」

「だが、断る!」

予定を変更して、ビルに逃げようかな。

「待たんか、イザヤ!」

なんで、いつも打鉄のブレードを持って走るんですか? あなたは、チートですか?

「後少し」

今、俺が目指しているのは勝手に学園に作った『非公式新聞部』の秘密部屋だ!

『イザヤはどこに行つた』

助かった、これも杉並の力だな。

「しようがない、今日は学園に仕掛けた盗聴器で面白い情報を探ろうかな?」

その時、携帯にメールが届いた。

From: 横無

『盗聴器全部外しといたから 今度したら許さないぞ』

生徒会長には勝てないのか、杉並よ。

こんな感じで小さな部屋に監禁しているんです。自分自身で。

「暇だな、アリーナに行こうかな」

行つたら戦闘に巻き込まれるしな。痛いの嫌なんだよね。

「諦めて、ラウラちゃんを倒しに行こうかな」

鈍い足取りでアリーナに向かつたが途中で止まった。

「楽しい、原作ブレイクができるじゃないか

イザヤはウキウキしながらアリーナに向かつた。

「やつてる、やつてる」

ピットの陰から覗いているが面白くない戦闘が行われていた。

「それじゃ、狙い撃つぜ？」

デュラハンを展開し、『影』をスナイパーライフルに変えて、セシリアと鈴に照準を合わせトリガーをひいた。音もなくその弾丸は一人の装甲に被弾した。

「後はこれにこれを足すと」

また、撃つが二人は全く気づかない。それは、弾丸がとっても小さく被弾しても機械が反応しない。

「遊びはこうじやないと」

イザヤは撃ち続ける。

「そろそろ、行こうかな」

イザヤは静かにアリーナに降りた。

「初めてまして、俺は折原臨也よろしく

イザヤは普通にラウラに挨拶をした。

「なぜ、貴様が居る」

ラウラは鈴の首を絞めながらイザヤの方を向いた。

「ここにいるから？」

「Iの二人を助けに来たのか？」

「まさか、俺が負け犬を助けに来るわけないじゃないか。俺は君の邪魔をしに来たんだよ。知つてた、この二人のエネルギーを削ったのは俺なんだよね」

「嘘をつくな！ 貴様は今ここに来たばかりだろ！」

「いや、俺はずっとピットから一人を撃ち続けていた」
イザヤは笑いながら近づいた。

「俺と遊ばないかい」

「貴様と遊ぶ暇はない！」

「一夏くんを殺せるって言つたらどうする？」

「詳しく聞かせて貰おうか」

「ラウラちゃんがトウナメント前にことを犯したから多分、ルールが変わるとと思うんだ。タッグ式にね」

「それで、私に特はあるのか？」

「俺と組んだらだれにも邪魔されずにやれるよ

「貴様は奴の仲間じゃないのか」

「仲間？ 違うよ、勝手にあっちが思つてるだけだって」

イザヤはアリーナに一夏くんの姿を見た。

「それじゃ、俺と遊ぼうか」

俺は『影』を刀にして近づいて斬りつけた。

「何をする！」

「仲間の力をしるのもいいじゃないか

刀はAICによつて止められた。

「やはり、こんなものか……なに！？」

ラウラは驚いた。なぜなら、刀はAICを通り抜け装甲に当たつ

た。

「何をした」

「斬つただけだよ」

「ふん、貴様の実力は分かつた。期待しているぞ、折原ラウラちゃんはピットに戻つていった。

「ラウラちゃんが帰つたし、どうしようかな？」

イザヤは地面に倒れている鈴を見下しながら呟いた。

「弱いもののイジメは嫌いなんだよね。それに、負け犬には興味ない

し」

イザヤもラウラの後を追いつひかけピットに戻つた。

輝かたいかい（前書き）

投票をおねがいします。

輝きたいかい

今日は楽しい事があつたし気分がいいな。

「それで、話は何かな？ シャルロットちゃん」
いつものようにシャワーを借りしてあげたら、話があると言わ
たよ、俺なにかしたかな？

「まずは、これを返します」

渡されたのはUSBだった。

「それで、他にも聞きたいことがあるんだろ？」

シャルロットは頷き口を開いた。

「あなたは一体何がしたいんですか？」

「また聞くんだ。いいよ、話してあげるよ」

シャルロットは驚いた。

「俺が話すなんて意外かい？ それは侵害だな、俺だつて普通な事
だつてするんだよ」

「よくそんなことが言えますね」

「何でだい？」

「今日したことはあなたの仕組んだ事ですか？」

「いいや、最初から決まっていた事だよあれは、それに俺は負け犬
には興味が無いしね」

「次にあなたはどこまで知ってるんですか？」

「さあ、俺にも予想が付かないな」

「最後に何で僕にあれを渡したんですか？」

「気分かな？ 俺はさ三下の連中が自分の周りを嗅ぎ回るのが嫌い
なだけだよ」

「本当にですか？」

「俺つてさ、嘘が苦手なんだよね。だから、いつも顔にでるんだよ
ね」

「わかりました。話は以上です。」

「それじゃあ、楽しい学園生活を送ろうか」「

出て行くシャルロットちゃんに俺は手を振った。

「人間はもっと、危機感を持った方がいいね」

イザヤは窓に寄り空を見上げた。

「君はこの空が好きかい？　俺は好きだね、暗闇は俺にあったものだからね。でも、君はあの星の様に輝きたいんだろ」

イザヤは一人しかいない部屋で真剣な顔をしながら話していた。

女の子って怖いね（前書き）

テストが始まり投稿できずすみません。
アンケートの方もよろしくです

女の子って怖いね

最初の対戦相手が最初から、一夏くんとシャルロットちゃんなんだよね。

「試合」ラウラちゃんに任せて帰ろうかな?」

「なに言つてるんだよ」

一夏くんが寄ってきた。

「ハンデとして?」

「ハンデなんかいらねえよ」

「一回負けたのに?」

「あ、あれは!」

「慌ててるな、よし! もう少し弄るつ!」

「攻撃も当たらないのに?」

「リーチの差がな……」

「燃費悪いのに?」

「……なにも言えない!」

試合前にこれは酷いな。

「それに」

言いかけたらシャルロットちゃんに邪魔された。

「僕のパートナーを駄目にしないでよ、イザヤは敵なんだから」

「助かった、シャルル」

「惜しかったな」

「何で、お前は一言多いんだよ!」

イザヤは笑いながら言つた。

「そこに、一夏くんが居るから?」

その言葉を残し、イザヤはパートナーの元に行つた。

「出で来い」

ラウラは静かにロッカーの方に目を向けた。

「バレちゃた？」

イザヤはナイフを右手に持ちながら現れた。

「お前の殺氣は鋭いからすぐ分かる」

「詰まらないな」

「私は軍人だからな」

二人の会話は暗く静かに響いていた。

「調子はどうだい？」

「悪くはないな。本当に奴を消せるんだろうな？」

ラウラは睨みながらイザヤを見た。

「君の力があればできるよ。君の力は頼りにしてるよ」

「私、一人で勝てる」

「じゃ、俺は今回は見学かな？」

そして、ピットに行きデュラハンを開幕しアリーナに降り立った。

「任せたよ、ラウラちゃん」

「ふん」

そして、試合が始まった。

なんとか、原作を崩しながらだが、ここまで来た。あと少しで折り返し地点だ。計画第2・5フェーズに移行される。

「さて、作戦を結構しようか」

デュラハンの『影』を薄くのばし、アリーナ全体に貼り付ける。この時はまだ、物質化していないためダメージはない。

「これで、お終いだ！」

一夏がラウラに雪片式型できりかかったがその剣はラウラには届かなかつた。

「動いたら君たちの負けだ」

一夏達の周りには黒い線が囲んでいた。

「チエックメイト」

「何をする！」

やられかけていたラウラはイザヤに怒つた。

「負けて貰つたら困るから、手助け？」

「私には必要はない！」

「A.I.Cが発動しないのに勝てるわけがないじゃないか。俺が助けなかつたら負けていたんだよ」

「私が負けるはずが……」

「現実を見よ、ラウラちゃん」

「わ、私は、私は、ああああああああああああああああ！」

ラウラは叫びだし、ISに黒い何かが覆った。

「システムがアサイケな物をつけるなよ、トイシ」

「イヤヤは謹にも闇こえない声で咳いていた。

「今日はなんて大変な日なんだぞ、な。これは俺の仕事でしょな」

「あれば、二冬柿の三

「あれは 千冬姫の だ！」
線が消えた瞬間、一夏は偽物に瞬時加速で近づこうとしたがイザ
ヤに止められた。

「引つ込め、雑魚！」

興奮している一夏を蹴り飛はし、偽物を見た。

— 價け物の姿で満足するのか！ お前は自分の力で

その言葉は普段のイザヤの口からは出ない言葉だった。

「シャルロット、隅の方で待機している。戦闘にお前を巻き込まな

い自信は俺にはない」

シャルロットは一夏を連れアリーナの隅に行つた。

君は勝手だね、救えるのかい。君にあの子が救えるのかい。弱い

君に

関係ねえ！

『いつも、俺にまかせていいる君ができるわけ』

一
関係ねえ。俺はあいつを助けるために表に立つたんだ。お前はあ
いつを見捨てたんだ。だから、俺があいつをあそこから引っ張り出

『勝手にしてくれよ』

他人から見たら一人で喋つてゐる様にしか見えないが、それは彼が二重人格のためだ。

「手を伸ばせばまだ助かるんだ！だから、そんな借り物の姿を捨ててこっちに来やがれ！」

イザヤは刀を構え走つた。

「行くぞ！」

偽物は上段から刀を下ろしたがイザヤはそれをよけた。

「まずは、その幻想をぶち壊す！！！」

イザヤは装甲を斬つた。その切り口から、ラウラが出てきた。

何故お前は強い。

「俺は強くないよ。俺は困つてゐなら助けるだけさ」

助ける。

「今の俺は誰でも助ける。手を伸ばせば」

誰でも。

「今回はラウラを助けた。頼つてくれたらいつでも手を伸ばすよ」

イザヤは自室に戻り咳いた。

「今日は疲れた」

『なら、俺に代わるかい？』

「久しぶりに表に出たんだ。明日もこれでいくぞ」
眠りについた。明日、地獄を見るとは知らずに。

「…………」

学校に着き速攻に寝ています。昨日大変だったんだよ。

「一夏ああああああああ！！！」

五月蠅いな！

「五月蠅い」

起きあがつた瞬間に見えた物は、シャルロットが女の格好をして、俺の胸ぐらをラウラが掴み引き寄せキスをされた。

「お前は私の嫁にする、これは決定事項だ！」

「つて！！ 嫁じゃなくて婿だ！ 誰だよオタク知識を入れ込んだのは！」

俺は叫んだが次の瞬間。

「イザヤくん、誰とキスしたの！ あの約束を忘れたの」教室にたつちゃんが入ってきた。

「あの約束？ 聞かせて貰おうか」

「笄はどこから日本刀をだしたの！」

「へえ、イザヤって女の子の前でキスするんだ」

「なぜ、シャルルはパイルバンカーを構えているんだ。

「シャルルと笄は関係ないとと思うのは俺だけか…！」

「こうなつたら、窓から逃げようと窓を開けると。

「どこに行くの？ イザヤ」

簪ちゃんがいた。

「俺つて、今日しぬの？」

逃げたいよ。

「ねえ、イザイザ」

のほほんさんが話しかけてきた。

「どうしたんだい

「好きだよ～」

「俺も好きだよ」

ん、待てよ、この発言つてこの場にとつたら〇〇じゃねえか！

「もう、煮るなり、焼くなりすきにしろ！」

次の瞬間、俺は意識はブラックアウトした。

一度ネタつて面白い? (前書き)

投稿の途中結果

樋無さん 4
簪ちゃん 2

シャル 1
マドカ 1

束さん 2

ちーちゃん 4
のほほんさん 2

まだ日にちもあるので投稿してください。
この投稿でメインヒロインが決まるわけがないのでお願いします。

一度ネタつて面白い？

朝、目が覚めてラウラちゃんが布団の中に居たり、簞がいきなり入ってきて竹刀でどつかれた。

「今日は町に行こうかな」

前日にシャルルに誘われたんだけど一夏くんに変わりを頼んだ。
「やっぱり、たくさん人がいるところは楽しいな」

町を歩くイザヤは女性の目が注がれていた。

「俺つてそんなに目立ってるのか」

『気づけよ、お前の格好は夏物だが、冬物にしか見えないしね』
「そっちの方が目立っているのはいいかな」

町に出てからには何か楽しい事が無いと面白くない。

「男のくせになに威張つてるんだよ」

あんなところで楽しい事をやつるじゃないか。

「イジメはかつこ悪いよ、よくないねえ、実によくない」

「おっさんには関係ねえだろ！」

苛められていた男は臨也を見てビビった。

「そう、関係無い」

臨也は二コ二コ笑いながら、二人の女子に向かつて宣言した。

「関係無いから、君達がここで殴られようがのたれ死のうが関係のない事さ。俺が君達を殴つても、俺が君達を刺しても、逆に君達がまだ18歳の俺をおっさんと呼ぼうが、君達と俺の関係は永遠だ。全ての人間は関係していると同時に無関係でもあるんだよ」

「はあ？」

「人間つて希薄だよね」

意味解らない事を言いながら、臨也は女達に一步近づいた。

「まあ、俺に女の子を殴る趣味は無いけどさ」

次の瞬間 臨也の右手の中には小柄なバッグが納められてい

た。

「あれ?
え?」

『一度ネタじゃないか?』

気に入らなければ負け。

臨也はニコニコ笑いながら、そのバッグの中から携帯電話を取り出した。

「だから、女の子の携帯を踏み潰す事を新しい趣味にするよ」
そう言いながら、臨也は女の携帯電話を宙に解き放つ。カシヤン
という軽い音が響き、シールがベタベタと張られた携帯電話が転が
った。

「あツ、てめ……」

女が懶てて捨ねると手を無ぜしとひるべ

その指先を掠めるよ、に臨せの足が携帯に踏み下された。

の欠片が足の裏からみ出した。「ああーッ！」と叫ぶ女の悲鳴を
気にしずに、そのまま何度も何度も右足を踏み下ろす。その動きは
まるで機械のように、寸分たがわざ同じ場所に足が踏み下ろされ続
ける。そして、やはり機械のように、同じ調子の笑い声を漏らし続
ける。

「アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

「ちよツ、こいつヤバイよ！ なんかキメてるよ絶対！」

「キモイよー早く逃げよー」

女達にとこかに迷いでいた

「飽きちゃた。携帯を踏み潰す趣味はもう止めよう」
臨せが立ち去るうとしたら、どこからかコンビニエンスストアに

ある「三箱が飛んできて、臨也の身体に直撃した。

「がッ！？」

これはあの人の仕業かな。

「人間社会」

「二十九」

エリザベスが王妃になったのは、スコットランドの王位を

田先生だ。

「いきなり、何するんだいちーちゃん

「校外でその呼び方を止めないと言つただひ、いーがーやーあ。」

「俺は何もしてないけどな

「なら、その落ちてる携帯はなんだ！」

『逃げるぞ！ 今いちーちゃんには勝てない！』

賛成だね、君に代わるよ。

『待て！！ お前は自分のご主人を売るのか！』

君の方がちーちゃんの対処うまいじゃないか。

『関係ない！ 俺はあの阿修羅の前にして逃げる気力がねえよ……

まで、デコラハンで壁を作り出して逃げる』

それで行こう。

「ちーちゃん、今日も綺麗だね。惚れそりだよ

「な、何を言つている／＼／＼／＼

田を逸らした、チャンス。

「バイバイ

黒い壁を作り出しダッシュで学園まで帰った。

臨海学校での楽しみ（前書き）

テスト中に書くのしんどいですね。
投票リストまで、あと2日です。お願いしますね

臨海学校での楽しみ

臨海学校って何が楽しいのか全く知らないや。原作を知っている分ここはおとなしく傍観にしてつしょうと思つたんだよね。

「もつ、着くのかい」

バスつて疲れるよね。

「イザイザ、自由時間一緒にジーチボールしよう」「隣にいるのほほんさんは凄くはしゃいでいます。

「ジーチに行けたらやろうか」

行く前にウサギちゃんに捕まると思つけど。

そんなやりとりをしていると旅館に到着した。

(今回の臨海学校は楽しみが多いな。これが終われば第3フェイズに移行だ)

「あら、じゅらが噂の……？」

旅館の女将だろう、挨拶は大事だね。

「ええ・・・まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

ちーちゃんは真面目なんだから面白くない。

「初めまして、折原臨也です。迷惑があるかもしれませんがあつしくお願ひします」

年上に挨拶するのはよくある事だけど敬語は疲れるよ。

「まあ、ジーテ寧にじうも。短い期間ですが楽しんでください」「さて、挨拶も終わつた事だし少し歩こいつかな。

「どこに行くつもりだ。いざや」

ちーちゃんに肩を掴まれて動けなくなつた。

「近くの森に森林浴しに行くだけだよ」

「ほお、お前が森林浴か。その前に荷物を部屋に持つて行け」俺は持つているバッグを一夏くんに投げた。

「頼んだよ、一夏くん」

「おい、なんでだよ」

「バッグをキャッチした一夏くんは文句を言つてきた。

「海より森が好きだから?」

「何で疑問系なんだよ」

「頼むよ」

そのまま、林の中に行つた。

「海の匂いは嫌いだから林はいいね。それに、衛星からの監視が緩くなるしね」

IS学園に入つてから衛星からの監視をずっとされていた。夜は別だけど。

「後は携帯の電波がいい所はどこかな?」

臨海学校は携帯の持ち込みを禁止されていて、周りには通信用の電波塔が少ない。

「あつた、あつた。これで、連絡がとれる」

携帯に番号を打ち込み電話をした。

『どちら様だ』

携帯からおっさんの声が聞こえた。

「この前、依頼した奈倉です」

奈倉はただ思いついた偽名だ。

『無人密漁船なんか、何に使うんだ?』

「その話なんですが、船の中に人を何人か乗せることはできますか?」

『別料金が発生するがいいか』

「なら、200万でいかがでしょう」

『解つた。明日でいいんだよな』

「そうです。お願ひしますね」

携帯をしまい、後ろを振り返り名を呼んだ。

「束ちゃん隠れてないで出てきたら?」

木の後ろから束ちゃんが出てきた。

『久しぶりだね。イザ君』

『久しぶりだね。それでは完成したかい?』

「イザ君の専用のバリアー無効化搭載の第五世代かな

「それだよ」

「君じゃ、使いこなせないよ」

「使つのは俺だけど、俺じやない」

「なら、これを渡しておくれ」

渡されたのは漆黒の指輪だった。

「ありがたく受け取るよ」

指輪を左手薬指にはめた。

「やつた～！ これで、イザ君と結婚できる～！」

「結婚はできないがお礼をするから何がいい？」

「そ、それじや！ キスをして／＼／＼／＼」

赤くなつた束ちゃんは新鮮だね。

「なら、目を瞑つてくれないかな？」

束ちゃんは頷きゆつべつと目を閉じた。

「頑張つたご褒美だよ」

キスをした、勿論続きは…… 読んでいるあなた方にお任せします。

「それじや、明日も楽しみにしとくよ」

「う、うん／＼／＼／＼」

旅館に戻り夜まで昼寝を楽しんだ。

女学生（前書き）

臨海学校の夜を書きましたよ、一々一々
投票は明日がリストです。

女子会

臨海学校初日夜

織斑姉弟の部屋に数人の生徒が集められていた。端から、篠ノ之
筈、セシリ亞・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラ
ウラ・ボーデヴィッヒ、更識簫、布仏本音の女性が集められていた。
千冬は片手に缶ビールを持ちながら言つた。

「お前等はアイツ等のどこがいいんだ」

その一言で凍りついた部屋が熱くなつた。

「まずは、一夏の事だ」

先に口を開いたのは筈だつた。

「私は弱くなつたアイツを鍛えてるだけです」
続いて鈴が顔赤くして口を開いた。

「お、幼馴染みとして／＼／」

セシリ亞はいつもの口調で呟いた。

「私はクラス代表として頑張つて欲しいと……」「
そうか、そのまま伝えといてやる」

千冬はにやけながら言つた。

「「伝えなくていいです！」」

鈴とセシリ亞が声を揃えた。

「次は、臨也のことだな」

千冬は目線を筈に移した。

「不思議な魅力に惚れました」

シャルロットは

「困つている時に助けてくれところです」

ラウラは

「手を差し出してくれたことです」

「あれは私でも予想外だった」

千冬は缶ビールを傾けながら次に簫に目線を移した。

「わ、私を必要にされた事が嬉しくて」

のほほんさんは

「そうだね～イザイザは本当の自分を隠していて本質では余り人に
関わりたくないってそんな所が好きなのです」

「布仏は臨也の深い所まで触れているな。なぜ、そこまで知ること
ができた?」

千冬は不思議そうに聞いてみた。

「週に一回相談されるからです～」

全員が驚いた、相談をするほど困った素振りしないのを見ている
ため余り信用できなかつた。

「教官はイザヤのどこに惚れたのですか？」

千冬は飲んでいたビールを吹いた。

「な、何をきいている

慌て出す千冬を見て全員の視線は千冬に向かつた。

「そ、それはだな」

その時、襖が開いた。

「温泉は最高だね」

臨也が現れた。

「皆さんお揃いで何を話していたんですか？」

臨也はにやけながら言つた。

「い、いや。私達はなにも

「そ、そうだよ」

「何だ詰まらないなー、てつきり恋の話をしてもと思つたのにせん
ねーん」

臨也のその顔は全てを知つていい顔だつた。

「折原、その指輪はどうした」

千冬はいつもの教師の態度に変わっていた。

「これは、ある人からの贈り物だよ」

「なぜ、左手の薬指に着けている」

「ちーちゃんもしかして嫉妬かい？ それは違うよこれはただの遊

びにいるものだから

「教師をからかうな、こぢや！…」

千冬が臨也を追いかけるために退室したため女子会はこれにてお開きになり、臨也を狙う女子はのほほんさんが最も近いと思つた。

せめぐわじゅは一一番辛いんだよ（前書き）

結果報告します！ 番外編第一弾のヒロインはむーちゃんに決定しました。また、20万PVに達成したら第一弾のアンケートを取りますので、今回投票してくれた方、されていない方も次回もお願いします。

生きてることは一番辛いんだよ

今日は I.S のパッケージの何かをするんだけど、詰まらないから旅館の上から皆の行動を観察してますよ。

「新しい I.S の性能はどんな物か確かめようか」

俺が見ている先は篠ちゃんが赤椿を纏つている所だつた。

「うーん、さすが束ちゃんだね。これならコイツの力も期待できるな」

俺は指輪を見ながら呟いた。

「それじゃ、俺も I.S を展開しようかな」

俺は I.S を展開してみた。

「さすが火力特化！ それにしてもターン X に似てないか？」

似ていないとこはワイヤークローフ付いてないし、他にスナイパー・ライフルが予備武装で入ってるけどな…… I.S で月光蝶は使えるのかな？

「使つたらヤバいな」

デュラハンの方に通信が入った。

『今すぐ会議室に来い』

ちーちゃんからの通信はそのまま切れた。

「面倒だから……こつそり入ろう」

会議室の前に着いた時なにか嫌な感じがし入るのを止めた。

「作戦なんか勝手にやつてくれよ、俺は密かに暗躍するのが楽しみなのに」

俺のデュラハンからもう一機の I.S の反応をキャッチした。その内容は『お前の計画を邪魔する転生者が現れた』

「俺と同じ存在が居るなんて反吐が出るほど殺したいな。どこに居るのかな」

ディスプレイを弄り検索してみたところ、こちらに接近していた。

「ステルス機能まであるなんてことん殺したくなるよ。それにし

ても、俺の計画は誰から漏れたんだろう？　一回洗つて、邪魔な奴らは消そうか

臨也の顔はとっても楽しい物を見たように喜んだ顔をだつた。
「さて、『ターンX』の力を試させてもらおうか

臨也はそのまま外に向かつて歩いて行つた。

お知らせ一 番辛いんだよ（後書き）

お知らせです。実は今月の終わりまでに文化祭に文芸部で出す小説が出来てないので投稿が遅く内容が薄くなりますがこれからも読んでください。

転生者は一人だけで十分だよ

「さて、『こ』に居るのかな？ 早く見つけて削除しないと」
ターンXを纏い探している。なんで、デュラハンじやないかつて、
それはデュラハンにはブースターが付いていないから飛べないんだ
よ。

「もしかして、あそこには浮かんでいる『エクシア』がターゲットか
一撃で仕留める」

このターンXは飛んでも音が出ない、相手に見つからないので簡
単に接近できる。

「シャイニングファインガーとせ、『こ』のゆうものだ！」

左手からビーム状物質を発生させ牽制し動けない相手の近くまで
行き右手で相手を掴み。

「このターンX凄いよ！ さすが のお兄さん！」

相手を左手に落とし留めをさす。

「こ、ここまでか！」

「君は俺を怒らせたからこれだけじゃすまないよ

「止めるよ、俺のエネルギーはないんだぞ」

「関係ないよ」

にやけながらながら後ろのパッケージを開き叫んだ。

「月光蝶！」

その瞬間後ろから青色のナノマシンが出てきた。

「ここだけ かよ！」

そのまま、相手の体はのこらなかつた。

「俺の計画を邪魔しないでくれよ。本当に邪魔にしかならないよ」

その間に一夏くんが撃墜された時間になってしまった。

「さて、作戦も終わつたしこミ掃除でもしようつかな？」

臨也は福音が去った後の戦場に来た。

「いたいた。それじゃ、お勤めご苦労様」

臨也はスナイパーライフルでエンジンを撃ち抜いた。

「証拠隠滅。作戦をこのまま継続させよう」

臨也は笑いながら宿舎の影に降りた。

「さて、明日まで休もうかな。それとも、今のうちに一夏くんを抹殺しようかな」

「それは出来ないよ。いつちーの部屋には教師が何人かいるよ」のほほんさんが物置から出てきた。

「それはどうもありがとう」

「どういたしまして」

「それじゃ、今回の事件が終わるまで俺の部屋に来るかい?」

「それもいいけど、今回の事件の結末を知りたいな」

「部屋にモニターもあるからきなよ」

「分かった~」

そのまま部屋に戻り結末を最後まで見た。

「それにしても、詰まらないな。さて、次の一手が楽しみだよ」

夏休みは暗躍のし放題

「IS学園の夏休みになり、俺は池袋に帰ってきた。

「学校が始まるまで色々な事が出来るな」

「その矢先に部屋のインターほんが鳴つた。

「こんな時に誰だい」

俺はインターほんのカメラを見たら意外なメンバーがいた。

『ヤツホー遊びに来たよイザヤくん』

IS学園の生徒会メンバーだった。

「どうしたんですか？」

『学園に居たら暇だから遊びに来たよ』

「分かりました、入ってきてください」

ドアのロックを解除し中に入れた。

「急に来ないでくださいよ。準備ができませんよ」

生徒会メンバーは部屋の書類の数に驚いていた。

「もしかしてこれ全部あなたが調べたの？」

たつちゃんは書類いの数に驚きふざけたことをしていなかつた。

「当たり前じゃないですか。そろそろ、お昼ですけどどこかに行きませんか」

「そ、そうね」

まだ、驚きの様だつた。

「さて行きましょうか。今回は全部俺が持ちますよ」

「お~イザイザ優しい~」

部屋をで目指したところはロシア寿司に行つた。

「やあ、サイモン久ぶりだね」

「オ~、イザヤタシブリ」

黒人のロシア人が出てきた。

「それじゃ、奥の部屋で良いかな」

奥の方から声がしてきた。

「お、折原じゃねえか。いつ帰ってきたんだよ
声をかけてきたのは二ツト帽をかぶった男だつた。

「久しぶりだね。ドタチン」

「お前は変わんないな」

「IS学園に行つて変わつたと思つたかい」

「思わないな」

ドタチンは笑いながら返した。

「お腹も減つたし早く食べないか?」

「その前に後ろの連中を紹介しろよ。お前の連れだろ」

「後ろの皆は生徒会のメンバーだよ」

その後は皆で寿司を食べ、何だか知らないが生徒会メンバーは俺の部屋に泊まつた。

「こ、これは何なの」

その夜、楯無は見てはいけないものを見ていた。

「それを見てしまつたんだね」

「イザヤくんこれは何なの」

その紙には『織斑一夏殺害計画』と書かれていた。

「その紙の通りだけ?」

「生徒会長として見逃せないわよ」

「ふふ、君がそれを見てただで帰れると思つていいのかい?」

臨也は一步一歩楯無に近づいて行つた。

「実は俺つて催眠術が得意なんだよね」

その瞬間、楯無は床に倒れた。

「コレを見られるとは全く思わなかつたよ。しょうがない早めに計画を進めよう」

もう一つ臨也の手に握られている紙には『亡国機業 計画』と書かれていた。

「さて、ここからは俺の出番なわけよ」

臨也は夜の池袋を見下ろしながら呟いた。

暗躍その2（前書き）

体育祭の準備で休みが無いです（泣）

暗躍その2

生徒会メンバーが帰った後、俺はある場所に来ている。
「時間どおりに来てるじゃないか、自称魔法少女ちゃん」
そこに居るのはちーちゃんを若くした女の子がいた。
「誰が自称魔法少女だ！ 私は織斑マドカだ、いい加減覚えろ」
「えーただのスキンシップじゃないか」
「それが、いらないんだ」
今さらだけど、場所は俺の事務所なんだよ。
「さて、君のI.Uをイギリスに採りに行こうか
「その件だ早く行くぞ」
「はあ、何で君はそんなとげとげしてるのでかな。
「えっと、確かにここに束ちゃんがくれた音速で飛ぶ小型飛行機が…
…あつた、あつた」
取り出したのは小さな飛行機の模型だつた。
「ふざけているのか」
マドカは呆れながら言った。
「それは、見てから言つてよ」
臨也は模型についている小さなボタンを押し床に置いた瞬間、模型は大きくなつた。
「あの女は意味が分からぬものばかり作るな」
「まあ良いじゃないか、それより早く行くよ」
俺は戦闘機の後部座席に座つた。
「なぜ、お前が後ろなんだ」
「だって、俺が潜入して取るんだから普通は後ろだろ」
「分かつた、早く行くぞ」
「いや、君が遅いんじゃないか」
俺が二コ二コしながら言つたら、銃弾が真横をかすつて行つた。
「余り私をおちょくるなよ」

額に青筋を作りながら言った。

「ほら、早く行くよ。時間があまりないんだから」

「お前がE.S学園に行くからだろ」

「まずは、敵の懐に忍び込んで戦力を調べるのが当たり前じゃないか」

「くつ、お前のくせに」

「余り起こると可愛い顔が台無しだぜ」

「キリ！ なんとなくここでカツコイイ事を書いておいた。

「か、可愛いだと／＼」

あれ、意外に効いてるのかな？

「そうか、そうか。なら、早く行つて仕事を早く終わらせるが」
マドカは操縦席に座りながら言った。

「そうすればお前との時間も作れるからな」ボソッ
なんだか、さっきから独り言が激しいな。

「それじゃ、イギリスに潜入しようか」

戦闘機はイギリスに向け飛び立つた。

「思つたがこれにはステルスは入っているのか？」

「当たり前だろ、それじゃないと俺が戦うはめになるし」

PV10万記念ー！（前書き）

時間が出来たので書けました

PV10万記念！！

時は遡り夏休み初日。

「生徒会の仕事が無いし、ちーちゃんでも弄ろうかな」
そう言って臨也は職員室に向かつた。

「で、デートだと」

「そう、デートしようつか」

なぜこんな展開になつたかと言つと、それは5分前の事だつた。

「遊びに来たよ、ちーちゃん」

「ここは遊びに来るとこじゃない！」

そう言って千冬は臨也目掛け主席簿を投げた。

「そんなことしたらいつか死人が出るんじゃないかな？」

臨也は軽々と主席簿を避け文句を言つた。

「その死人があなただつたらいいがな」

「それは酷いな？ 僕は良い事を言いに来たのに」

「良い事だと」

千冬は警戒した。

「明日、デートしない

「今何と言つた」

「デートしない？」

「で、デートだと」

千冬は顔を赤くしながら言つた。

「そう、デートしようつか。明日学校の門の前で待つててるから、バイ」
そう言つて、臨也は部屋に戻つて行つた。

翌日

「時間言つてなかつたけどいいよね」

そう言いながら臨也は門の前に行つたら、スース姿のちーちゃん

がいた。

「えーいつもの格好か、期待していたのに」

「何に期待してるんだ」

「ちーちゃんがフリフリのワンピースを着てくると思つたから
その瞬間臨也の頭に千冬の手刀が叩き込まれた。

「痛いよ、ちーちゃん」

臨也は頭を押さえながら訴えた。

「大人をからかうからだ」

「からかつてないよ。ただのスキンシップじゃないか」

「お前のはからかってるんだ」

「ちーちゃんは冗談が通じないんだから」

「本当にお前は人を怒らせるプロだな」

「もしかしてこれぐらいでキレたの？」

「いい加減しろー」

千冬は近くにあった標識を引っこ抜いた。

「それはシャレにならないよ。本当に死人が出るかもね」

「その死人はお前だ！」

ちーちゃんはそのまま標識を振り回しながら追いかけてくる。

「ほらほら、どこを狙つてるのかな」

標識は臨也の真横や真上を通過していく。

「当たらんか、そしてシネエエエ！」

「駄目だよそんなんじや、俺には当たらないな」

いやー普段銃撃を避けることが多かつたせいか苦じやないな。

「なら、これならどうだ！」

ちーちゃんが持ち上げたのは2セトラックだった。

「それはもう、犯罪だから」

いや、最初から犯罪行為しかしないから。

「これなら当たるだろ」

大型トラックが飛んできてそのまま。

「それこそ当たらない、落下速度があつても浮いてる時間が長いの

はアウトだね」

そのやり取りが夕方まで続いた。

「いやー今日は楽しかったよ、ちーちゃん」

「私は余計に疲れたよ」

「まあ、今日みたいな楽しい時間を忘れないよしじなよ」

「どうゆうことだ?」

「そのうち分かるよ」

臨也は二口ほど笑って部屋に戻った。

暗躍その3（前書き）

体育祭の練習で体力が底をつきました。
くそお、なんで体育祭なんてあるんだよ。

暗躍その3

「起きる、研究所上空についたぞ」

起きて見ると本当に下に研究所があった。

「じゃ、そのまま突撃して」

「…………」

臨也の発言で機内は一瞬静かになつた。

「何言つてゐるんだ！ 私は自殺しに来たんぢやないぞ」

マドカは臨也の発言に反発した。

「大丈夫、突撃しただけじや壊れないから。それに帰りはオータムが拾つてくれるし」

「なら、こりはどうするんだ」

「爆破するに決まつてるだろ、研究所じたいね」

臨也は微笑みながら言つた。

「分かつた、衝撃に備えろよ」

戦闘機は研究所に急降下し突撃した。

「ターンX展開」

臨也は研究所に着いた途端ターンXを展開した。

「マドカちゃんは俺の後ろからついて来て、今回は迅速に終わらせ
るから」

「お前は仕事になると真剣になるから日頃からその態度でいとけ
「それは無理だし、無駄口をたたいてる場合ぢやないね」

すでに周りには武装した人間が集まつてきた。

「なつ、ISだと！ 勝ち目がない」

情報通りに研究所に居るのは普通の人間だけだった。

「さて、ショータイムだ」

臨也は一瞬にして周りを血の海に変えた。

「田舎てのものはこの奥か」

「本当だらうな」

「いいだ、シャイニングファインガー」

臨也は扉に左手をかざし扉を溶かした。

「本当にあるとわな」

「これじゃまるで俺達に使ってくれと言ひてるみたいだね」「マドカはサイレント・ゼフィルスを纏い離脱する準備を整えていた。

「それじゃ、ここに向かって飛んでね。俺は別のルートから帰るから」

「臨也はサイレント・ゼフィルスに脱出のルート地図を送った。

「了解、今回

「は」

そこで臨也は遮った。

「それはまだ言つたら駄目だよ、死亡フラグ」

そのまま臨也は別ルートから離脱する前に研究所のデータを根こそぎ奪つてから外に出た。

「それではみなさん、ご唱和ください
Interaction!!!」

はあ、これで楽しい事が増えたな。

「帰つて情報を整理して解析しようか、について」

臨也は後から来た戦闘機に乗り込み池袋に帰^モもした。

「これはこれでまた仕事が増えるな」

臨也は池袋に着く前に情報を整理し計画の進行度を計算していた。

「年明けまではどうにかなるな。これで俺の計画は遂行される」

その声は暗闇の池袋に静かに響いた。

夏休みの終了のお知らせ（前書き）

皆さんのおかげでPV20万アクセスいました！ そこでまたアンケートを取りますよ。

樋無さん

ちーちゃん

簪ちゃん

束さん

ラウラ

マドカ

のほほんさん

の中から投票してください期限は10月末までです。

夏休みの終了のお知らせ

研究所を爆破し、IS学園に帰つてきました。

「この門を見るのも久しぶりだな」

久々に見る門を見ていると声を掛けられた。

「何してみたいーぞーや」

後ろに怖い鬼がいた。

「夏休みを満喫していたんだよ」

だつて今日が始業式だつたはずだから。

「始業式は昨日だ！　お前は無断欠席してビニにいた！」
えつと、行つて帰つてきても……大丈夫じゃなかつた。

「教室に行きますね」

「いや、その前に職員室で質問タイムといこつか」

ちーちゃんの後ろには鬼の姿が映つていた。

「それは困るよ、早く教室に行かないといろいろ大変なことになりそうだから」

何だか嫌なことになりそuddから。

「それもそうだな行つて來い」

すんなりといかせてくれたちーちゃんなんだか顔が引き攣つっていた。

た。

一組では学園祭の出し物を決めていた。

「ビニはやつぱり。織斑君と折原君のホストクラブでしょ」
なんでこうなつてるんだよ。確かにこの学園には俺と臨也しかい
ないけどこれは酷過ぎないか。

「ここは織斑君と折原君とツイスターでしょ」

「ちがうー！　ここは織斑君ち折原君とポッキーゲーム」

「それ、先生も賛成です」

なんだと！　先生までもが参加してるぞ！　こうなつたら誰も止

められないのか。俺は周りを見渡したが筈は参加してる、セシリ亞も同じく、シャルは赤くなりながらも参加、ラウラは何かを閃いた様だ。

「なら、コスプレ喫茶にしないか？」

クラスの女子は全員が賛成した。

「遅れてごめんね」

その声とともに現れたのは臨也だった。

なるほど、二六「山喫茶がまだ三分位も二がな」

その間で、いかにたむかひた

娘は利の意見は賛成しないのが

昌黎縣志

「せつが、そつか稼は私の意見が一々のか

はんでその間で幕とシャレは布一顔ある。が。

「おお、アーヴィングがアーヴィングで簡単だ。俺は阿修羅のアーヴィング

「『セイホウ』」

それでもクラクションが止まらない。

「駄目だよ、折原くんもホールじゃないとお密さんがあまり来ない

۹۷

「男のお姫さんも少ないし、女性のお姫さんは男の子を求めてるん

卷之三

「しょうがない、俺も全力で参加するよ」

その言葉とともに学園祭の出し物が決まってしまった。

生徒会（前書き）

投票は感想にお願いします

生徒会

学園祭の出し物が決まって生徒会室に来ています。

「凄い山ですね」

俺の机の上のは部活の部費に関する資料が積まれていた。
「ごめんなさい、お嬢様はイザヤくんに任せると言つてしまつたので」

虚さんは謝りながら作業をしていた。

「これぐらいあると面白いですから良いですよ」

紙を見ていくと面白い事しか来てなかつた。テニス部『天衣無縫の極みが欲しいです』テニスを楽しんで下さい、却下。次は調理部『チエーンソー』何を斬るんですか、却下。次は新大陸発見部『シナップスに行きたい』勝手に行つてください、却下。S.O.これ以上はアウト、却下。非公式新聞部、それは俺だけだから却下。剣道部『若き頃の千冬様』本人の前で言つてください、採用。バスケ部『翼が欲しいです』諦めたらそこで、試合終了です。却下。まともなものが無いな……B.L.部、悪寒があるので却下。

「この学校つてまともな部活が無いですね」
俺が話しかけると虚さんは呆れながら言つた。

「この学校は変人が多いですからね」

その発言はこの学園の8割の人を指していますね。

「本當ですね」

「その中に折原さんも入つていますよ」

当たり前じやないか、変人こそ最強なんだよ。

「否定しないんですね」

「自分でも思つてる事ですから」

その発言で虚さんはため息を吐いた。

「それにも会長来ないです」

「お嬢様なら織斑さんを誘拐しに行きました」

「ここでまさかの犯罪発言！」

「あの会長は何でもありますか？」

「その質問は折原さんにも返します」

「俺は『ごく一般な生徒A』ですよ」

「ごく一般な人は織斑先生に追いかけられません」

失礼だな。

「僕は何も悪くない僕は被害者だよ」「本当にいつも俺は悪く無いのにね。

「さて、書類も片付いたから帰るよ」

本当に全部見たんだよ。片付いたんだぜ。

傍観者の暇つぶし（前書き）

体育祭が中止になり月曜に延期とかないでしょ～

傍観者の暇つぶし

一夏くんの練習を見ている折原臨也です。今日は生徒会の仕事が終わったので傍観することに決めました。

「それにしても、素晴らしいな」

雪羅になつてから燃費が悪くなつたつても弱くなつてゐるよ。

「何やつてるのイザイザ～」

練習を見ていると後ろからのほほんさんが登場した。

「やあ、今ね一夏くんの練習を見ているんだよ」

「面白い？」

のほほんさんはいつもの調子で聞いてくる。

「あまり楽しくないな、これなら今からでも死んで欲しいくらいだよ」

「いつものように答えた。

「それなら、倒したらいいじゃん」

「俺はジャンプが好きだから、少年誌みたいに特訓するのを見て笑うのが好きなんだよ」

「それって好きに入るの？」

「だつて、勝てない相手に特訓して勝てるのが少年誌だけど、それは現実を見てないからできる行為なんだよ。だから彼らがやつてゐる事は一種の現実逃避みたいなものさ」

臨也は練習風景を面白そうに見ながら話した。

「だから、今度の学園祭で痛い目を見てもうおうかなつて思つたんだ。面白くなりそうだと思わないかい」

「いいね～それ、私も見てみたいな～」

のほほんさんはそれでもいつものように答える。

「それじゃ～敵さんはとっても強いの？」

「やじは見てから秘密つていいたいけど、俺はそんなの嫌いだから言つてあげるよ」

「わ～い」

「敵さんは強いよ、油断だんさえしなければね」
臨也は平然と秘密を喋っている。

「さて、彼の仲間を何人かこちらに引きずり込めないかな」
「そうだね～一、二人ぐらいなら居るんじゃない」

「例えば？」

臨也は珍しく他人の答えを聞いてみた。

「ラウラちゃんとシャルちゃんかな？」

「あの二人か、ラウラは分かるがなんでシャルなんだ？」

「シャルちゃんはイザイザに恋をしてるんで～す」

「知らなかつた」

その臨也の顔は驚いていた。

「それなら、二人にお話しをしに行こうかな」
今日は取りあえずここに居ないラウラのところに行こうかな。

闇への誘い（前書き）

投票お願いします

闇への誘い

俺は自分の部屋にラウラちゃんを呼び出した。

「話つて何だ？」

ラウラは真剣な顔をしながら臨也を見る。

「君はまだ、一夏くんを嫌つていいかい？」

「まだ、納得がいかない」

この回答は予想が出来た。なぜなら福音事件の際、ラウラちゃんは座標を教えてだけで現場には向かっていないからだ。

「その解答だけで嬉しいよ

臨也は喜びながら麦茶を飲んだ。

「何か、事を起こすのか

「さすが軍人さん、勘が良くて助かるよ

やつぱりこの子はこちら側に居てくれるのが良いな。

「」の前のようなことをするのか

「話してもいいけど、ラウラちゃんは作戦に参加してくれる？」

「嫁のする事には従う」

これは最高のエンディングにいけそうだよ。

「これから話すことは俺達一人だけの秘密だよ」

「了解した」

「なら、話そう。俺がする一大イベントを全て」

俺が話している間何も聞かずにしてを理解してくれた、これらのこと全て。

「どうかな、面白そうだろ」

臨也は一コリと笑いながら手を伸ばした。

「私もその作戦に乗ろう、軍人として契約した人間との仕事は最後までやり通す」

ラウラも臨也の手をとり計画に参加した。

「それじゃ、明日はシャルルちゃんのどこに行こうかな」

「それは無理だろ」

「何故だい？」

「シャルルは嫁の惚れでいるがそんな事はしないはずだぞ」

「それなら、脅せばいい話じゃないか。そっちの方が俺らしいしね」

「情報の操作をすれば三日以内にこちらの手に落ちるだろつ。

「ラウラちゃんは俺からの連絡があるまでは学園祭では待機して欲しいな」

「了解した」

「この間にも俺の計画は進んでいく、ここからは原作を無視した話を展開して行こうじゃないか。

「嫁よ本当にそんなことが可能なのか」

「可能じゃなくて、可能にするんだよ。俺の手で」

「そう言つて臨也は持つていたグラスを落とした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6851w/>

転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

2011年10月17日21時42分発行